

# 尊皇と禪

吹毛軒 山崎益洲

我等日本臣民は、我國の現情より見て、今日如何なる理想に向つて、何を爲すべきか、又世界各国の情勢を如何に認識すべきか、又臣民としての公務を如何にすれば誤りなく盡し得るかが現今我等に與へられた最大な問題であり、これを急速に實行し實現すべき時であると信するものである。

今日世界各国の動向は、明日を論ぜられぬ動向で、猫の目よりも、七面鳥の變化よりも急に、寸時も油斷を許さぬ權謀術策を弄して、道義を無視し、利害關係の上には、一切他の得失を顧みず、口に親善を唱へながら、實は我利々々主義で、一片の親切同情などは、寸毫も持ち合さざるものゝ如く、吾人をして啞然たらしむる行動を敢へてなして少しもはゞからぬのが、現在諸外國の政策であり、個人主義國家の情識であると思ふ。これが今日各國の動きである。

それから見ると、日本人は義理堅い、正直な國民性であるから、一度約束をすれば、如何なる困難に遭遇しても、能くその約束を護り、利害を超越して徹底先方を信じて疑はぬ。ゆへに時としては大に馬鹿を見ることがある。從來支那に對する、親切も結構ではあるが、始終老婆親切が過ぎて

事件の解決には損もし、無駄手間もある。支那人を濟度するには、もう少し手厳びしく、支那民情を知る必要を感じる。「父嚴ならざれば子孝ならず」。支那人は矢張り、親善よりも自覺をなさしむべき手段を忘れてはならぬ。古語に「一番寒の骨に徹するにあらざれば、いかでか梅花の香しきを知らん」で、今度の戦争で苦難を骨身に徹せしめて置くことが肝要と思ふ。

今迄の如く米國式を讚歎し、英國流、佛國形を模し、獨逸精神を取り入れる愚を止めて、日本はどこまでも日本特有の國民性と建國の精神を發現すべきである。

我國は神國である、神の心を心として正直に立つて號令すべし。古より邪は正に勝たすと云ふ。大義至誠は、天の聲であり、神の心であり、人類平和の基本、人世生活上一日も缺くべからざる大道である。これ八紘一字の大精神にして、これを徹底顯現し高唱するのが、日本人の使命であり、日本の國體であり、これ日本人の聖業である。

この尊き使命と聖業を自覺し理解して、道義を無視し個人主義に墮落しつゝある國家をして、八紘一字の我國體の眞義を領得せしめ、これを指導する立場にあることを寸時も忘れてはならぬ。

我國體と國民性は、開國以來世界を指導し、人類を救濟すべき使命を具有す。換言すれば、我が國は世界の本家であり、祖先であり、父母國である。

萬世一系の我が國は世界無比の國體にして、

天照大神と同一身にまします。宇宙の最高唯一神、宇宙統治の最高神たる 天皇顯現の國なればなり。

實に世界の齊しく依るべきことは神典に明かに宣言されたる、

天照大神の下し賜へる 御神勅に

豊葦原の千五百秋の瑞穂の國は、是れ吾が子孫の王たるべき地なり、宜しく爾皇孫就きて治せ。ささくませ。寶祚の隆えまさんこと、當に天壤と窮り無かるべし。

神武天皇の御宣言に、

養正の心を弘め、六合を兼ねて都を開き、八紘を一字となさん。

明治天皇の

四方を經營し萬里の波濤を開拓して、天下を富岳の安きに置かん。

との御信念は、共に共に神國日本建設以來の大理想にして、この八紘一字の大理想顯現こそ、實に世界に於ける、父母國たる日本の使命であらねばならぬことは明白である。

天皇は絶對にましまして、森羅萬象は 天皇の御姿ならざるはなく 天皇の顯現ならざるはなし。宇宙は神の顯現にして即ち 天道道である。

かくの如き尊き、神の顯現である 天皇を戴き 天皇の御姿を拜し 大御心を體して、全世界を

救済し、宇宙の全人類を指導するの責務を持つ我國民は、誠に光榮であり、幸福である、この皇國日本に生を受けたることを感謝せねばならぬ。

宇宙の唯一神、最高の眞理具現者であらせらるゝ、天皇を信仰し、萬古　天皇を仰ぐ是れ皇民の、萬國に比類なき名譽である。ゆへに、

吾等の信仰は　天皇陛下中心信仰である。

吾が禪宗では、宇宙の大道、即ち眞理に融合せんが爲に、十年二十年坐禪の修行により、正念を相續して、自己本來具有する本心本性を暗ます大敵たる我慢我執、私利私欲を折伏し去りて、宇宙の唯一佛の境地に達せんと行業純一に修行して、法身佛を體得す、これ　天道の顯現に外ならず。この　天道たる人間の本性に還らせ、社會を救済せんとする、これ佛道の人世に缺くべからざる教法である。

禪の極致より云へば　天皇に歸一し奉らしむるための修行の法門にして、自己救済の爲の修養にあらず。しかし　天皇に歸一し奉ることに依て、自己も又救済せられるのである。換言すれば、大日如來、阿彌陀佛を念することによつて、大日如來、彌陀佛に救はれるのではなく、大日如來彌陀佛に歸依、歸一することによつて吾も又救済されるのである。

巧利的欲望をなくする爲に、心身脱落と云ふ心身を棄て切る修行をなす、その心身脱落に到るの

が、見性であり、大悟である。これ 天皇に歸一するゆえんである。

禪では、心身一如、凡佛不二の妙境を自得するのが修行の目的で、日本的に言へば、心身一如、凡佛不二とは、君民一體への修養、即ち忠への道である。これ君民一體の自己が尊きにあらず、自己に體現せられたる 天皇の尊きを體得するのである。

身のために君を思ふは二心

君のためには身をも思はじ

天皇は國家のためのものにあらず、國家は 天皇のためにより。

かくの如き大自覺は、永遠悠久の 天皇の唯一最高道により、國民の頭上に明白に現はる。

自己の學殖、職業乃至生活の程度によりて、尊皇の程度に輕重があらば、それは自己中心の人物であり、唯々身心を捨て棄て、更に何物をも望むことなく、本來無一物、無所得、只管に 天皇に歸一し、歸命すること、これ國民大悟の境涯なり。

天皇の大御心に合ふ如く、「私」を去りて行爲する。是れ日本人の道德にして、御歴代皇祖皇宗の御詔勅は、皆これ大御心の發露に外ならず。此の御勅語の大精神は「天壤無窮の皇運扶翼」にして個人道德の完成に非ず。天皇の御守護には、老若男女を問はず、貴賤貧富に拘らず、國民齊しく馳せ參じて以て死を鴻毛の輕きに比すること、これ日本人道德完成の道である。天皇の御爲に死

すること、是れ道徳完成なり。天皇と同一體なるが故に、吾々の日々の生活行爲は悉く、皇作、皇業となる。これ日本人の道徳生活である。この道徳生活を體得實現するのに、禪的修養により、飯に逢ふては飯を喫し、茶に逢ふては茶を飲む、行も又禪、坐も又禪と云ふ。禪的修養に依らねば、ただ知つた、分つたと云ふのみにて、日常生活に實現すること能はぬ。

吾が宗祖臨濟禪師曰く『吾れ法の爲に喪身失命を避けず』と、又京都大徳寺開山大燈國師の遺誠に曰く『佛祖不傳の妙道を以て胸間に掛在せずんば、忽ち因果を撥無し、眞風地に墮つ皆是れ邪魔の種族なり、老僧世を去ること久しくとも、兒孫と稱することを許さず、或は一人あり野外に綿絶し、一把茅底折脚鐺内に野菜根を煮て喫して、日を過すとも專一に已事を究明する底は、老僧と日々相見報恩底の人なり』と、又同じく妙心寺開山關山惠玄國師は『惠玄が這裏に生死なし』と喝破せられた。

明極楚俊禪師は、大楠公戰死直前に於て『生死交叉の時如何』の間に『兩頭を截斷して、一劍天に倚つて寒まじ』と答へて、殉忠報國と生死不二の端的を直指された。

かくの如く、禪的境地を以て、皇運扶翼の大道を明示して省悟せしめ、國民の正路を端的に直示されたもの、無學禪師の北條時宗に於けるが如く其の他史實に明かである。

禪の修養によりて、大義に透徹し、尊皇精神に生きることの出来るのは、畢竟、尊皇精神と禪の

境地が、一致するからである。

曹洞宗の開祖道元禪師曰く、『佛法を習ふとは、自己を習ふなり、自己を習ふとは自己を忘るゝなり』と、滅私奉公とは、即ち佛法を習ふにある。

快川禪師の『心頭を滅却すれば、火も又涼し』と絶叫されしは、困苦缺乏の大精神を甘受して餘りあり。山中鹿之助の『我に七難八苦を與へ給へ』と、三ヶ月に祈りしに、優ること幾千萬倍ぞ。

世の中で第一等の人物とは我執去つて、尊皇殉皇に生き抜く人である。

元來宗教も、教育も、藝術も、文學も悉く、無我無執の大道に到るの道ならざるはない。

眞忠は忠を忘る、念々是れ忠なるか故に。

醍醐天皇延喜元年、菅原道眞公は、佞姦藤原時平の讒に遭ひ、順逆の一大事なるに、更に辨疏の意なく、只管に、勅命を畏み、大宰府に貶せらるゝや、常に謫居の門を閉じて謹慎せられ、日夜恩賜の御衣を捧持して餘香を拜し、聖恩の無窮を喜び、聖壽の萬歳を祈らる、何ぞその心の忠烈なる。尊皇に生きるの忠臣と云ふべし。高杉東行の歌へる如く、『君見すや忠鬼と爲る菅相公、靈魂尙在り天拜山』古より讒姦忠節を害し、忠臣君を思ふて躬を懷はず、讒と否とを問はず、勅なればいとど畏みひん鱗伏し奉り、詔を承けては必ず謹み奉る、是れ皇國臣民の第一義である。

忠臣大楠公の如き、献策遂に用ひられず、大命出づるや一途に畏み、湊川に出陣し 大君を思へ

ば心安からず、一子正行を残して、天皇の御守護に任せしめ、躬は忠魂となりて、三世一貫更に寸毫の私心なし。百世に相傳へて感憤興起せしむ、大命重く、身命を羽毛の輕きに比す、皇國の龜鑑であり、此れ宗教的行爲によつて得たる信念にして、尊皇に生きたる忠士である。

萬山重からず君命重し、一髮輕からず我命輕し。

平重盛は、父清盛の不臣を諫めて曰く、『父命を以て王命を辭せず、王命を以て父命を辭す、家事を以て王事を辭せず、王事を以て家事を辭す、君と父とを竝べて親疎を分つことなく、君に付き奉るは忠臣の法なり』と、實に重盛は國體を辨へ、君臣の大義に透徹せる忠臣といふべし。

思ふに今時支那事變に際し、應召せらるゝや、將兵各位は、生死を顧みず、家事を捨て、陛下の股肱として、山野幾萬里の外に日夜寒暑を侵して、奮闘邁進し、天壤無窮の皇運を扶翼せらる。これ實に皇國の精華にして、大義に立脚せらるゝ殉忠の士といふべし。

畏れ多くも上 陛下に於かせられては、日夜仰ぎては神明に仕へ給ひ、俯しては人民を安じ給ふ。これ神人一體に基く祭致一致の御天職を全うし天下を御調理遊ばさる。

又法を以て民を帥る給ひ、徳を以て民を服し給ふ。これ君臣一體の御天業を以て國家を平治し給ふの 大御心と拜し奉るのである。

陛下は國治り民安かるを以て大御心と爲し給ひ、國治らず民安からざるを以て御憂と爲し給ふの



である。ゆへに臣民たる者は、我見我意を去り、私心私利を棄て、只管に陛下に忠義を盡し奉るを臣民の道となす、これでこそ、君民一體、上下一心の國體と申すべきである。その忠義を盡したると同時に、國土人民の安寧幸福を得らるゝこと、これ一體一心の働きであり、これが國體の妙處であり、これ皇祖皇宗の大御掟であつて、神孫の大御法である。

仁徳天皇の、浪波高津の宮の御仁政の如き、大御心の御發露である。

後醍醐天皇の御製

世治まり民安かれと祈るこそ

我身につきぬ思ひなりけり

孝明天皇の御製

澄まし得ぬ水に我身は沈むとも

濁しはせしな四方の民草

明治天皇の國威宣揚の御詔勅の中に

「今般朝政一新ノ時ニ膺リ、天下億兆一モ其ノ所ヲ得ザルトキハ、皆朕カ罪ナレハ」と宣はせられたる大御心は全く天照大神の御精神と申すべく、國民は齊しく恐懼慚死すべきである。

君民一體とはいへ、君民が混雜混合することではなく、君民の分は元より明かなるが故に、君の

心と民の心と其の歸を一にするのである。

大日本は神國なり、天祖始めて基を開き、日神長く統を傳へ給ふ。ゆへに大義天地を貫き、君臣の分は炳乎として日月の如し。君無窮なれば、扶翼の臣も亦無窮なり。

一切の物が皆流轉する中に於て、宇宙に於ては天地の位は變らず、人間に於ては君臣父子の位は變らず、從つて吾々が日常蹈むべき道としての忠孝の大義は斷じて變らない。その理法を吾物にするのが、悟りであり、信仰である。信仰とは盡して盡しぬくことである。

頼三樹三郎の死刑に遭ふや、

わか罪は君か世思ふまこころの

深からさりしるしなりけり

天皇は民に徳を垂れさせ給ひ、民は 天皇を神と仰ぎ皇運扶翼を專一となす。それは國民各自の業務仕事を通じて、天皇の大御心に添ひ奉る處に、神國精神の永遠に生きる骨髓がある。それで國民道徳の上には、權利義務、又は犠牲はない。君は民を養ひ、民は君の爲に捧げ、親は子の爲に子は親の爲に捧げる、つまり捧げ合ひの道徳で、自分を捧げて相手の中に生きる、捧げ合ひの日本精神を特に 君に捧げて尊皇精神を深める。これが爲に、法律、教育、宗教、政事、産業等も必要であるのである。かくして天業を恢弘し、皇道布施の世界維新に邁進する。少くとも東亞の維新即ち

天皇を盟主とし奉る東亞の結成に奮進せねばならぬ。しからずんば七生滅賊も空論となり、皇運扶翼も空念佛に終る。

天皇陛下萬歳を日夜自己生活の中に具現し奉行しつゝ、全身全力を傾倒し、皇運を無窮に扶翼し、皇業を四海に宣布し、八紘一宇の精神を此の地上に建設するは、皇國臣民最大の責務である。尊皇は絶對なり、皇民の望む處は高位高官、蓄財に非ず忠烈の大士である。

釋尊の菩提樹下に於ける、心中無數の魔軍と闘ひ、遂に強賊を亡ぼし、宇宙永遠の大生命を活したるも、猶全世界の人類を救濟せずんば、我正覺を取らずと誓願す。釋尊をして日本に生を受けしめなば、大日、阿彌陀を説かず、天皇歸依の妙諦を顯現し皇道の第一義を宣布せられん。故杉本中佐の如き、二十餘年禪の苦練により、尊皇精神に生く。無私無我の禪に徹して、皇運扶翼に邁進することが尊皇の秘法にして、億兆その堵に安んずるの皇謨は實現成就すべし。杉本中佐曰く、「汝吾を見んと要せば尊皇に生きよ、尊皇精神のある處常に我在り。」(終)